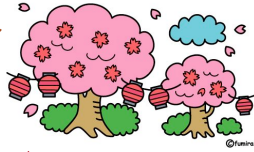


春

お花見
(3月末～4月)



子ども歳時記

日本には、季節にちなんで行われる行事や風習が数多くあります。それぞれに理由や目的があり、人々の願いが込められています。



7月

七夕祭り
(7月7日)

春は花見の季節です。平安時代からその主役は「桜」。桜を眺めながらその美しさを詩歌で表現し、美術品や工芸品のモチーフとしても使いました。江戸時代になると、桜の下に大勢で集まることが好まれるようになり、弁当や団子、桜餅、酒などを持ち寄って、にぎやかに花見を楽しむようになりました。岐阜県の根尾谷の薄墨桜（樹齢約1,500年）は国の天然記念物として有名です。市内では西武庫公園などできれいな桜が見られます。

7月7日の七夕の節句には、裁縫や習字の上達の願いや詩歌などの文を短冊に書き、笹の枝に飾ります。この行事は「夜に七夕の織姫（こと座のベガ）と天の川をへだてて白く輝く彦星（わし座のアルタイル）が年に一度だけ会える」という中国の伝説と「村で選ばれた女性、機織女が機織り小屋にこもり、神の来訪を待った」という日本の言い伝えが結びついたものとされています。夏の晴れた夜は、南の空の天の川を見てみましょう。

(執筆：引地)



となりのともchan

～あいさつ (3) 「いただきます」～



11



(カボチャの花：上村画)

食事をする前の「いただきます」という言葉—たった6文字の言葉ですが、そこにはさまざまな意味が含まれています。

まずは、食事を作ってくれた人や、その食材となる魚をとったり、肉・卵や野菜などを育てたりしてくれた人に対する、感謝の気持ちが挙げられます。そして、何より『生き物の命をいただきます』という意味が込められています。つまり私たちは、動植物の命をいただくことによって、自分の命を維持させているのです。それはまさに、命のバトンを受け継いでいくことであるとも言えるかもしれません。

ただ、今の子どもたちにとって身近な食材というのは、スーパーなどにも並べやすい、美しく形の整ったものが中心となっています。そのため、その食材の自然本来の姿をなかなか目にすることができません。ですから、テレビや本などを通してでもいいので、実際はどのような形をしているのか、それを知る機会を大切にしたいものです。自分が食べているものが、どこでどのようにして作られているのか・・・それは、とても興味深いことのように思います。

また、食事の後には「ごちそうさま」と言いますが、これを漢字で書くと「御馳走様」となります。「馳走」という言葉は「馳」も「走」も「走る」という意味をもっています。「走り回る」という言葉に「御」と「様」をつけて、食材を集めるためにあちらこちらを走り回ってくれたことに対する、感謝の気持ちを込めているのです。

つまり日本には、食べる前にも食べた後にも、感謝するという習慣があるのです。このように、些細なことですが、日常的な事柄における感謝の習慣というのは、これからも大切にしていきたいものです。

ちなみに、「いただきます」と「ごちそうさま」を言うことによって、食事の開始と終了がはっきりします。『ごちそうさま』をした後には食べない』など、メリハリをつけることによって、ダラダラ食いや食べ過ぎの予防や改善にもなります。



(執筆：胡中)